

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成26年7月16日 NO.32 (132)

花ちゃん 「オー君。きのう、1年生の子が、セミのぬけがらをもってきてたわ。」

オー君 「うん。おいらも見せてもらったよ。背中（せなか）がパカッとわれていたやつだろう。これからは、いろいろなセミのぬけがらが見られるぞ。」

花ちゃん 「ねえ、オー君、わたし、セミをたまごから育（そだ）ててみたいな。」

オー君 「そんなの無理（むり）だよ。たまごから幼虫（ようちゅう）になるのに10ヶ月。それから5～6年もかかるんだぜ。セミの地下（ちか）の生活（せいかつ）には、まだわかってないことがたくさんあるんだよ。」

花ちゃん 「そうなの。ところで、セミの鳴き声（なきごえ）って、いろいろあるんでしょ。」

オー君 「そうさ。チーチー、ミーンミン、ツクツクオーシ、シャワシャワ、ギーギー、ジジジ、チッチッチ、ジージージーとかいろいろあるよ。」

花ちゃん 「そうか。セミはいろいろな鳴き声のシャワーで、夏をしらせてくれるのね。」

オー君 「花ちゃん。夏の鳴き声シャワーか。うまいこと言うね。でもね、シャウシャウと鳴くのは、クマゼミといって関東地方（かんとうちほう）より西（にし）の方に多（おお）いセミなんだよ。」

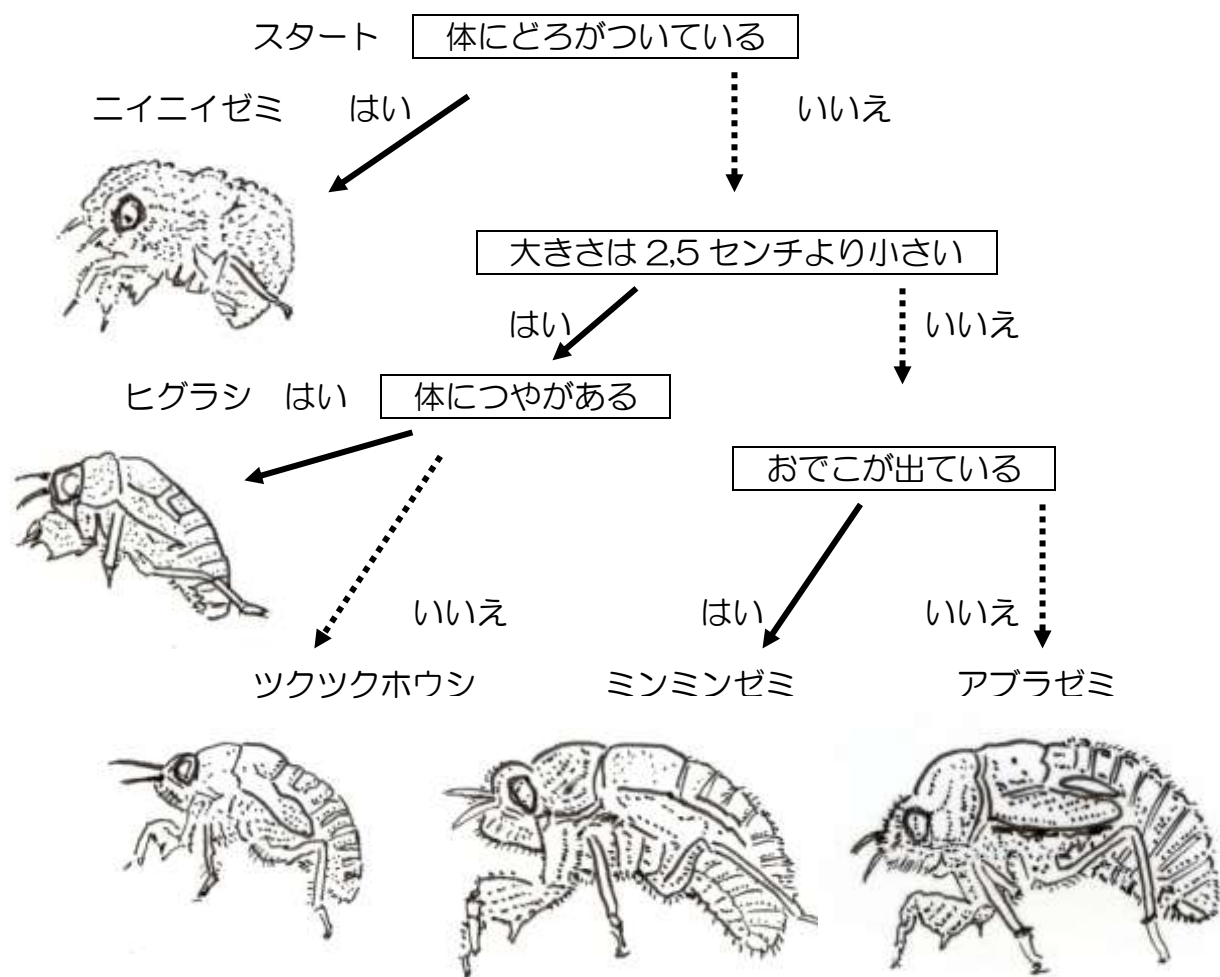
花ちゃん 「私、セミの羽化（うか）の様子（ようす）を見たいな。どうすればいいの。」

オー君 「そんなのかんたんだよ。明るいうちにセミがよく鳴いている公園（こうえん）か神社（じんじゃ）に行って、うすくらくなくなってから、かいちゅう電灯（でんとう）をかた手に、地面（じめん）からはい出してきた幼虫をつかまえればいいのさ。幼虫はそのままにしていると、高（たか）い木の上に行ってしまうから、そうっとおうちに持ち帰って（もちかえって）、お部屋（へや）のカーテンにとまらせれば、ゆっくりと羽化を観察（かんさつ）できるよ。おいらについて来な。くもりでくらい日などは、昼間でも見えるぜ。」

花ちゃん 「あれ！さっきから、モンタ博士、何か書いているけど、何かな？」

モンタ博士「ジャーン！完成（かんせい）！ぬけがらから分かるセミのけんさく表（ひょう）だ。」

セミのめけからけんさく表



国立ラフ・ストーリー…(セミバージョンの巻)

ジージー。やあ！みんな。こんちわっす。ここは、たしか、下谷保のハケだったよな。おっといけない。自己紹介をしなくちゃな。おいらはアブラゼミのいけめんセミ吉だ。大きな声で鳴くのは男の証。「本鳴き」というのは、遠くにいるメスを呼ぶためさ。かわいい憧れのキュウーティなセミ子ちゃんにおいらの鳴き声が届けとばかり、大声で鳴くのさ。ツクツクボウシというセミは1匹が「オーシー・ツクツク」と鳴いていると、近くにいるオスが、「ジュウ…」とまるで横槍を入れるように声を出すそうさ。これをちなみに、「じゃま鳴き」というらしいが、おいらはそんなせこいまねはしねえよ。大声はりあげて勝負するだけさ。

おっと！憧れのキュウーティなセミ子ちゃんがこっちに来るぞ。やったー！天にも昇る気分とはこのことか。おや、おいらの鳴き声に惚れたようだ。てくてく歩いてこっちに来るぞ。さて、そろそろ「本鳴き」から「誘い鳴き」に変えなくちゃな。「誘い鳴き」とは愛の印さ。ラブコールっちゅうんだよ。おいらも接近しちゃえ。つぎにおいらのやることは、セミ子ちゃんの羽の先をチョンチョンとたたくのさ。セミ子ちゃんがおいらの事を好いてくれりゃ、羽なんかバタバタさせないはずだ。頼む！バタバタさせないでおくれ。お願い・・・と、その時、バタバタとセミ子ちゃんのはるか遠くの空へ……。

参ったな。落ち込むよ。また、ふられちゃった。まあ、いっか。男は失恋する度に強くなるんだからな。次のラブ・ストーリーを目指して鳴き続けるだけさ！さあ、城山のあたりから一橋大学あたりでも流してみっか。そして・・・セミ吉の愛のさすらい旅は続くのであった。完。おしまい。幕。